

佳作

私の小さな挑戦、横手の大きな未来へ

秋田県横手市立平鹿中学校

2年 志賀 陽愛

私の住んでいる秋田県横手市には、まだまだ眠っている未来のタネがたくさんある。そのタネを芽吹かせ、花を咲かせるのは、私たち若者の役目だ。私は今、そのタネを少しでも育てようと、横手市で地域と深く関わるチャレンジを行っている。

今年の8月2日、横手市の複合施設「あお一な」で行われた、知事と県民の意見交換会を傍聴した。テーマは「“稼ぐ力を高める産業の振興”を目指して～若者がつなぐ、支える、伸ばす県産品の未来～」名前だけ聞くと堅そうだが、中身はむしろ熱かった。横手市のあちこちで活躍する若者たちが集まり、自分たちの現場のこと、夢、そして横手の未来について語り合った。農業分野の発表では、横手名物「いぶりがっこ」を県外や海外に広めようとする挑戦が語られた。クラフトビール製造の若者は、地元産ホップの香りや味わいをもっと多くの人に知ってもらおうと、観光とセットにした「飲みに来たくなる街づくり」について語り、会場をワクワクさせた。自動車部品製造の若者は、人と人が出会い、つながる場をつくることの大切さを話し、「部品づくりも人づくりも同じ」と笑顔で言ったのが印象的だった。それぞれの発言からあふれていたのは、「横手をもっと良くしたい」という強い思いだった。私はその姿に胸が熱くなった。同世代に近い人たちが迷いなく自分の考えを伝え、未来のビジョンを語る。その光景を見て、「私もいつかこんなふうに堂々と地域のために話せる人になりたい」と強く思った。会場全体に広がる熱気と期待感が、私の背中をぐっと押してくれた。

私は普段、横手市のジュニアリーダーとして活動している。子ども会や地域の行事で、レクリエーションを進行したり、安全に配慮しながら子どもたちと遊んだりしている。正直、学校生活や部活動との両立はとても忙しく、時間が足りないと感じることも多い。しかし、笑顔で遊ぶ子どもたちを見ると、準備の大変さも一気に吹き飛ぶ。誰かの楽しさや安心を支えることが、自分にとってやりがいになっている。

その力をもっと伸ばすため、今年の夏に秋田県ジュニアリーダー研修に参加した。会場は由利本荘市の岩城少年自然の家。県内から集まった仲間と3日間の共同生活が始まった瞬間、緊張よりも「ここで何を学べるだろう」という期待で胸がいっぱいになった。出会いの集いから始まり、キャンプファイヤー計

画、子ども会KYT、スタンプ交流、子ども会研究会など盛りだくさん。最初はお互いぎこちなく、会話も少なかったが、活動を重ねるたびに笑い声が増えた。クライマックスのキャンプファイヤーの夜、火を囲んで歌いながら見上げた夜空には、満天の星が広がり、「この仲間たちと過ごした時間は大切な宝物だ」と感じた。この研修で得たのは、レクリエーションの技術だけではない。相手を尊重し、全員で一つの目標に向かう大切さ、限られた時間で役割を果たす責任感、そしてそれをやり遂げたときの達成感だ。この学びは、これからの活動でも必ず生きると感じている。

私のもうひとつの顔は、「あお一な」学生ボランティアだ。今年の2月、かまくらまつりに参加し甘酒を振る舞い、県外や外国から来た人々と笑顔を交わした。うれしそうな表情を見たり、「ありがとう」と感謝されたりすると、冷えきった体が少し温かくなった。かまぐらの決まり文句「あがつてたんしえ〜。(お上がりください) のんでたんしえ〜 (お召し上がりください)」には横手の温かい人柄がつまっていると感じるとともに、地域の奥深い魅力を知った。

今年の9月には、最大のイベント「A o - n a フェス」が控えている。このフェスは学生主体で企画し、私は音楽フェス部門を担当。出演者とのやりとりや当日の流れを組み立てている。準備はハードだが、仲間と話し合いながら形になっていく過程はわくわくするし、当日を想像すると、自然と力が湧いてくる。

こうした活動を通して分かったのは、横手市は自然も食も人も、すべてにおいて魅力的だということ。でも、その魅力がまだ十分に外に届いていない。横手市は力を秘めている。だからこそ、私たち若者がまず横手を愛し、その良さを知り、周りに広めていくことが大切だ。イベントやSNSで発信し、外とつながることで、新しい挑戦や交流がどんどん生まれる。

私はこれからも、ジュニアリーダーや学生ボランティアとして動き続ける。大好きな地元横手市の魅力を一人でも多くの人に知ってもらうために。そして若者の自由な発想と行動力で、横手の未来をもっと明るく、もっと面白くしていきたい。横手の魅力を届けるため、私のチャレンジはまだまだ続く。